まちづくりネットワーキングえひめ

舞たうん

VOL 41

重信川河口

特集　地域を担う人材育成 ーまちづくり塾からー

『地域から学ぶ』

- 伝統にこだわり、心を育てるまちづくり
- だんだんと言えるように‥‥ゼロからの出発
- 塾の学習活動を通して見えてくるもの
- 地域から学ぶ
- 限りなき挑戦―地域からの夢―

アングル

協同活動と地域づくり……愛媛県経済農業協同組合連合会代表理事会長／西森　勸……1

特　『地域を担う人材育成 ーまちづくり塾からー』　集

―地域から学ぶ―

伝統にこだわり、心を育てるまちづくり……重信町／大西　忠良……2
だんだんと言えるように……ゼロからの出発……野村町／上口　等……4
塾の学習活動を通して見えてくるもの……土居町／坂本　宮子……6
地域から学ぶ……丹原町／山内　雅明……8
限りなき挑戦―地域からの夢―……波方町／長谷部伸太……10

論談ーまちづくりー

今、地域づくりは……大分県大山町役場ダム対策室長／緒方　英雄……12

キラリ光るまち

次世代へつなぐまちづくり……愛知県瀬戸市役所企画課／中桐　章裕……14

レポート

第3回環境自治体会議……16
県外先進地研修……17

ふれあい広場

リレーでちょっトーク（新宮村・城辺町から）……18

研究員活動を振り返って……愛媛県庁／松森陽太郎……20
大三島町役場／藤原　元久……22

風の便りから

地域づくりのベースを求めてー管見スイスを歩いた2週間／見想録XIー……24

Information

媛のくにフラッシュ……26
〈伯方町・伊予三島市・久万町・広田村・城川町・日吉村・中山町〉
愛媛県からの組織改正のお知らせ……29
全国まちづくり調査

特集〝地域を担う人材育成―まちづくり塾から―〟

今号のテーマ ―地域から学ぶー

今日、情報化の進展、地球規模での自然環境の悪化、価値感の多様化など、その変化の激しさや社会構造の変革などの要因から、精神的な安らぎや「心の豊かさ」を求める声が高まっている。

このような背景から、生態系に基づいた環境の保全や開発のあり方等、先人達の過去の体験・経験の例証から学ぶことの大切さが、多方面から叫ばれている。

また、まちづくりにおいても、オンリー・ワンのまちづくりを目指し、その土地の持つ風土や自然、地場産業、あるいは人的資源等を活かそうという取組みが重要視されてきた。

これからのまちづくりにおいて、その土地らしい風景や歴史の中で培われた文化を学ぶことで今まで気付かなかったふるさとの魅力や地域の特性を認識し、そのことで、地域に対する愛着や誇りも併せて育くむきっかけになる。

そして、急速な時代の変化への適応能力と先見性を身に付け、地域の未来をどう輝かせるかが問われているのではないだろうか。

そこで、このような視点で、地域から何をどう学び、また、その手法を探るため、今号から塾活動にスポットをあて、メインテーマを「地域を担う人材育成ーまちづくり塾からー」とし、サブテーマを「地域から学ぶ」として編集することとします。

表紙の言葉

重信川河口では、河原の風とも、海風ともつかぬ風が吹いているような気がします。

アオサギが近くまで、チョチョとやって来るものだから私の方がびっくりして、あわてしまいましたが鳥は雄然と羽根づくろい。

重信川河口

協同活動と地域づくり

愛媛県経済農業協同組合連合会
代表理事会長
西森　勸

時代と共に大きく変ってきたのは、私達を取り巻く社会環境・生活環境であり、自然環境です。それは、すべて人間の社会的欲求によるものだと考えます。

そのことによって、今私達が反省しなければならないことは、経済的効率を追究するあまりに、自然環境の破壊という大きな損失と、地方の農山村の過疎化、伝統・文化が失われつつあることです。

最近、よく〝まちづくり・むらづくり〟という言葉を耳にしますが、都市社会の肥大化・日本人の働きすぎなどにより、〝やすらぎ・ゆとり〟を求める声が高まり、地方の見直し…つまり、地方の活性化のために、国・県が諸政策を打ち出し、全国各地でいろいろな形での取り組みが展開されております。

私共農業団体（農協組織）は、多岐にわたって事業・運動を地域において展開しているので、決して〝まち・むらづくり〟と無関係ではないと考えます。むしろ、協同組合運動を通じて、地域社会に貢献する役割・使命があります。

具体的に申し上げますと、県下ＪＡ（農協の愛称）では、Ａコープ店を中心とする生活事業や自動車燃料事業・住宅事業・特産品加工事業等に、地域に密着した協同活動の展開とともに県内農業振興による農畜産物の安定供給のために、生産・販売事業や生産資材事業を通して、地域の経済・生活の向上に寄与することとしております。

現在の〝まち・むらづくり〟を見ておりますと、県下でも行政主導型、第三セクター方式等の様々な形で、活性化のために諸施策が講じられていますが、大切なことは、若い人や女性の意見・考え方が、どこまで反映されているかということです。確かに、公園・レジャー施設・直売店等の施設も必要ですが、地域の各階層の人達が交流・学習のできる場（例えば、内子町の知的農村塾）をつくり、自由に意見交換できる環境づくりから始めなければ、このような運動は長続きしないと思います。

そこで出てきた貴重な意見を実現するために、役場・商工会・ＪＡ等の各種関係機関が一体となって、資金・土地・人材を支援し、地域に根ざした基盤をつくる中で、その夢を形にしていくことが大切ではないかと考えます。

そして、私共農業団体としては、何ができるかをいろいろ考えていきたいと思います。

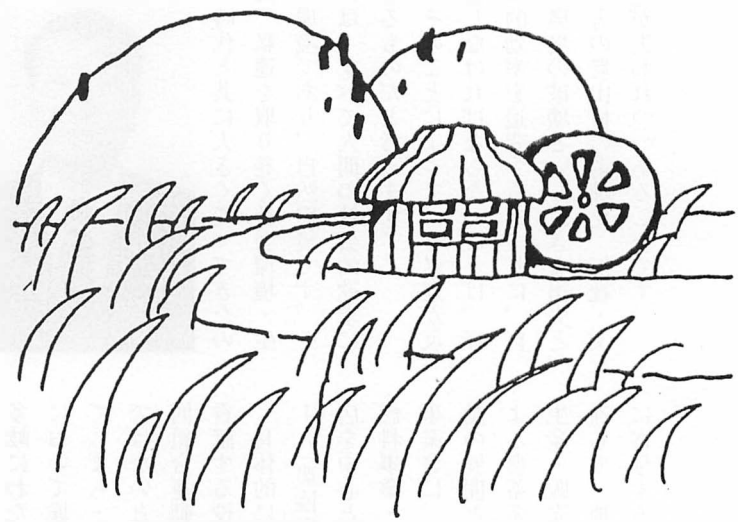
たとえば、農村と都市の交流の面では、観光農園・貸農園の設置や農業体験ツアーにより、農業や食べ物の大切さを理解して頂く。

地域おこしの面では、特産品を開発し宅配便で県内外に発送し、産地名を宣伝する。また、地元の観光物産店に、新鮮な農産物や加工品を供給する。さらに、地域の伝統・文化を守るために、商工会の青年・農業後継者等が連携して保存伝承するなど、様々な取り組み、支援ができると考えます。

今、農業は自由化により、非常に厳しい時期に直面していますが、「農業を守ることが地域を守ることになり、農業を発展させることが地域を発展させることになる」と考えます。そのためにも、各ＪＡが地域の協同組合として、より一層協同活動を促進し、地域づくりに積極的に参加・協力をしていく必要があります。

地域の活性化のために、「本当に何が必要か」、「何を守っていかねばならないのか」を一人ひとりが真剣に考えていくことがますます重要になってきたと考えております。

特　集



『伝統にこだわり　心を育てるまちづくり』

牛渕昭和倶楽部
会長　大西　忠良

一、倶楽部の発足

温泉郡重信町牛渕、三百五十戸足らずの集落で、今や松山市のベットタウン的存在であり、住民の大部分が第二種兼業農家であります。

戦前は、ほとんどが米麦を主体とした専業農家で、純朴そのものの典型的な農村地帯であった。由緒ある〝一宮〟といわれた浮嶋神社の鎮守と、高野山真言宗道音寺とを併せ持ち、それを誇りとして信仰心の豊かな集落でもありました。

この地に、明治末期に篤志家の熱意により、倶楽部が生まれ（後に大正倶楽部と改名）、一途に、〝村の改善〟を目標に置き、終戦直前まで活発な活動が継承されて参りました。

その倶楽部の設立や運営の記録の中に、次のような記述がありま

す。「我が牛渕大正倶楽部は、明治四十一年（茶話会として）創立されたものでありまして、今、昭和十四年で三十二年の歴史を持っております。いまだ会の規則とか規約とか言うものはありませんが、不文律の中に目標があります。それは〝牛渕の改善〟であります。（中略）時には、講演会や軍人慰労、戦死・戦病者追悼、七ヶ寺参り等の様々なことをしながら、三十有余年過ごして参りました。しかし、皆、付録の行事でありまして、要は我が〝牛渕の改善〟に外ならぬものであります」。

以上のように、煩雑な規則を持たず、ただ、部落の発展に奉仕することを目的とし、終戦直前まで価値ある活動を続けてきたのであります。以後、部落も終戦とともにめまぐるしく変ぼうする世相と、急速に都市化が進む中にあって、生活の中で昔から自然と培われて来た潤いや安らぎが、年ごとに薄れていく様を直感するようになって参りました。

このような背景の中で、昭和六十年三月十四日、昭和倶楽部が生まれました。

二、倶楽部の組織

役員は、部長職一人で、その人一代、部長の職に留まり、職を辞することはできない。定期的会合は、毎月第二土曜日と定め、会員A氏宅二階で実施している。（この二階は牛渕部落の諸道具が集められている）

目的は常に不変で、旧大正倶楽部の目標につきる。

スポンサーもなければ役職の肩書き、学者もいない、平凡な地域住民の幅広い年代層の集団で性別に関係はない。会費は参加した時、五百円を支払い多少の接待がある。（誰でも自由に参加できる）

個人の名誉や利益追求には、全く縁がない倶楽部であります。

ただし、ひとたび行事を遂行するとなると、どんな時でも百名前後の人々が、自然と集ま

るから不思議です。
それは、お互いが住む部落を見つめ直すことによって、昔の姿・良さを再び取り戻して行こうという運動であり、誰言うとなくまとまってきた意見、つまり、皆が主人公だからであります。

三、伝統行事復活への実践活動

〈浮嶋神社里神楽の復活〉

県内でも中予地域では、伝統的な神楽は東予・南予と異なり、ほとんどの地域で消滅していたが、残された文書を研究して、神楽十二点を復活させた。それは、村人の鎮守の森での活動の中に生かされ、はやくも満八年を迎えることができました。

神楽舞は他の芸能と比較しても、さして面白味は薄いが、その舞を舞うことによって、自分の心を磨くよすがとしている。

村人には何度も紹介もされたが、今もそれを村の外へ持ち出すことは余りない。この伝統的な神楽の主役は、二十代から四十代の若者である。

特に、平成五年十月二十四日、伊勢神宮式年遷宮の年に、伊勢神宮特設舞台で奉納できたことは意義深い。

〈菖蒲祭や虫送り行事復活〉

現在の私達がこのように村に愛着が持てるのは、自分の歩んだ幼少の思い出があるからでございましょう。「子供の心を育てよう」を合言葉に復活を試み、五月五日子供の日に、鎮守の森では村人による菖蒲祭式典が毎年行われていたのを活かし、子供の活動ができる場づくりを考えようと、二十四代式守伊之助氏を招へいして子供相撲を復活。小学生を中心に、男の子も女の子も大会に参加しており、今年で八年目を迎えております。年々、相撲人気の上昇に合わせ、村の子供達全員が参加するようになり、保護者の協力のもと、技術的にも一段と向上をして参りました。子供達のうれしそうな笑顔も見られ、来年は念願であった、中学生の参加も期待できる状態まで充実して参りました。

また、道音寺における百万遍、昔からの農村の伝統行事復活もできました。子供達は太鼓を叩きながら、舗装された水田横の道を、昔ながらのかけ声を出し合い、元気よく行列を組んで暑い夏の一時、倶楽部会員を供に従え歩んでいきます。子供達にとっては、意味の分からない一つのイベントでありましょうが、八年間の歩みの中で、自然と行事の伝統性を知り、村の人々と触れ合うことができるでしょう。この日は特に、倶楽部女性会員が総出で、子供達に百万遍珠数ぐりの後、ごち走が振舞われます。

二十四代式守伊之助さんと一緒に

四、今、話題の中心

〈これからの活動への展望〉

現在までの活動を通しての成果として、今年度は次のことがあげられる。

平成六年は国際家族年、三世代による獅子舞を今年の十月に行われる秋祭りで実践する運びとなった。本当に楽しくうらやましい風景で、数組しか実践できない貴重なものです。

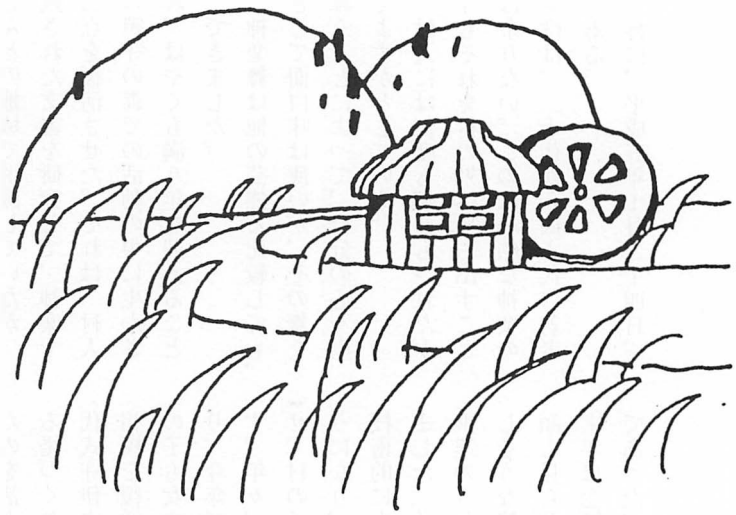
また、三世代による神輿の競演など、家族全員の参加、特に、夫婦による伝統行事への参加が増加してきたことが成果の一つだと思います。

〈夢実現への課題〉

老人への対応は、地域の中でともに生きたいという願望が、会員の間からも聞こえるようになってきました。

今、心を豊かにすることによって、人間関係に潤いをと、「老人の館」建設の夢がつぶやかれています。行政に求めるのではなく、地域の力で考えて実践していく構想が、話題として頻繁に話し合われ始めてきました。そう遠い日を待たずして、実現への一歩を踏み出したいものであります。

獅子道場建設・町並みなど、昔からの伝統行事にこだわり続ける中で、村づくり・人づくりの夢を追いつづける昨今であります。



『だんだんと言えるように……ゼロからの出発』

惣川夢追人

上口　等

「だんだん」（惣川地区の方言でありがとうの意味）と言える若者が何人いるでしょうか？　惣川地区でその言葉を知っている若者は少ないかもしれません。どこの地域にも、そういう方言はたくさんあると思いますが、今の若者は、はたして使っているでしょうか？　方言とは、その地域の風習、慣習によって生まれた一つの文化といえると思います。その地域で暮らし、生きていくには多くの文化を受け入れていくことが大切だと思います。

【若者の減少】

数年前に地区内のお年寄りから「若者を見んなあ？　おるんか？」と質問されたことがあります。若者は少しはいるんだが、活動の場がないので見かける機会が少なかったのだろうと思います。

近年の農業不振、その他の理由により、地区内で生計を立てていくことが難しいなど、働く場を求めて若者も流失し、そして、高齢化が進み、昔のような活気がなくなってしまいました。

【青年団の消滅】

惣川地区にも十年程前には青年団があり、地区の清掃活動、年中行事の運営ができるほど若者もいたし活気もありました。しかし、年々団員が減少し、五年程前には惣川青年団という名称が町連の組織図からも消えてしまいました。

【惣川夢追人の発足】

その当時、十五名程度の若者はいたのですが、若者の活動や交流の場もなく、そして、若者の減少により、連帯感や仲間意識が薄れてきた。また、地区事業への参加、参画意欲も失われ、若者の存在感が無くなってしまいました。

何とかしなくてはいけない。何名かの若者が集まって話をして、昔の青年団の良いところを生かして、今風にアレンジしたものならば良い動きがとれるのではないかということになりました。

人間は常に夢を持っているものです。互いの夢を尊重し、理解し少しでもその夢を形にしたいと思うでしょう。

そして、若者の交流の場を多く作り、地区内に明るい話題を提供したい。そして、「若者あり」を地区内に意識付けができたら…

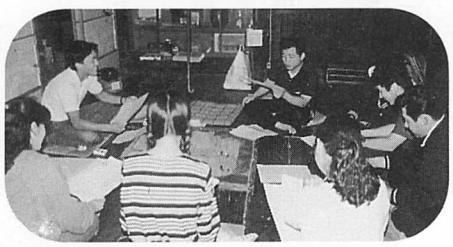
これらをコンセプトに、地区内の若者（先生・農協・郵便局・役場職員・自営・会社員）に呼びかけ、平成二年七月に『惣川夢追人』が発足しました。

しかし、当初三名しか集まらず、どうなるんだろうと大変心配になりましたが、一人また一人とメンバーの口コミで仲間が増えてゆきました。

現在、三十二名にまで成長しています。

【夢を持とう、フリースタイルで】

惣川夢追人は、役員は作らず公民館職員が事務局を務め、段取り



をしてメンバーに情報の提供、交流の場の設定、地区行事の手伝い、このような活動を行いながら、連携を深めております。この会は、各自の意志を大切にし、会費をとらず実費で運営し、会則はその時々に応じて改廃できるようになっております。かえってこのスタイルが良かったようで、色々な活動をする場合でも、積極的に参加するようになりました。そして今では、夢追人という名称も地区内に浸透し受け入れてもらえるようになりました。

　今年の冬には、犬ゾリレースをしにヨーロッパに行こうという夢も出ており、実現させたいと考えております。夢追い活動の中、積極的に参加して行きたいと思っています。

【主な活動内容】

　活動内容は、地区新聞の発行、地区外のグループとの交流、そして地区内の文化、伝統の伝承をしたりしています。まだまだ、地区行事の参画までは至っていませんが、色々な活動をして行くことで、そこへ到達できるのではないかと思っています。

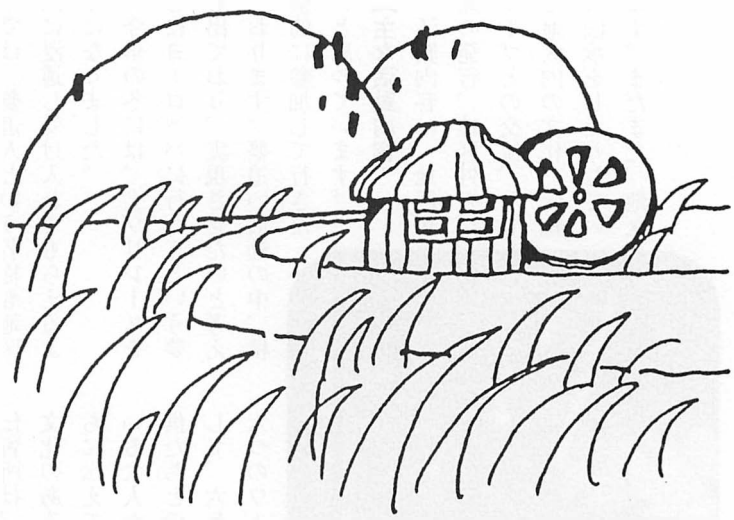
　そして、昨年夏には夢追人、自在舎、地元有志、メンバーの友人の協力を得て、惣川みどりの伝習所を企画、運営しました。一年半もかけて、じっくり、少しずつ意識を高めていき、一人一人が意見を述べる中で実現しました。この伝習所は、惣川地区の豊かな自然、文化のある惣川を舞台に、子供たちに伝えておきたいものを持っている大人たちと、それを求める子供たちとの伝習の場、交流の場として、六名の先生にお願いをして六つのワークショップに分かれ、四泊五日の日程で行いました。この五日間、子供たちと先生方の楽しい思い出を作ることができました。また、みどりの伝習所を通して、惣川の良さを先生方、子供たちなど、周りの方から教えていただいたことで、メンバーもふるさとの魅力を再発見できたと思います。

　また、夢追人の輪も大きくなったと感じました。

　その輪を大切にしながら、今年八月に第二回を計画、現在準備を進めております。

【最後に】

　みどりの伝習所は、夢追人にとって大事業でしたが、これも地域に根ざした活動がもっともっとできるようになるための一つの手段とも考えております。これからも、自由な発想・スタイルで活動していきたいと思っています。それらを通して、地区の良さをさらに再認識し、地区外へ自信を持ってアピールできるようになれば、惣川地区の将来、文化、福祉、教育等を考えることができるようになると考えており、そうなれば自然に「だんだん」と言えるようになると思うし、そう願っております。



『塾の学習活動を通して見えてくるもの』

土居町生活文化女性塾「風」
坂本　宮子

「やさしさを運ぶ風」をグループイメージに、平成四年八月にスタートした私達の活動も三年目(二期目のスタート)を迎えました。

「自主活動、自主運営」を合言葉にスタートしました。発足当初は何をしようかと戸惑う面もありましたが、先ずは自分達の身近な所からの学習をと進めて参りました。

第一期の活動を振り返って見て印象に残ることとして、「女性についての学習」「アメニティ・ゴミ問題」、「土地の歴史・文化について」の三つが挙げられます。

中でも、土居の歴史・文化に触れようと実施した『ふるさとウォッチング〝古代のロマンを求めて〟』は、地元で郷土史研究をされている村上光信先生に現地での説明など、ご指導をいただきながら実施をしましたが、特に印象深いものとなりました。

普段、仕事その他で車ばかり利用して歩き慣れない者もおりましたので、無理のないように半日コースにし、参加者の希望を聞きながらコースの選定をいたしました。

土居のほんの一部の場所を訪ね歩いただけでしたが、一つの場所や事柄からも数多くの歴史の深さを知ることができ、次々と新しい発見があり学習意欲を深めるきっかけにもなった様です。

参加した塾生の感想のほとんどが、「住んでいながら知らなかった」あるいは、「長老や本などから見聞きして知ってはいたが、今まで来たことがなかったので、場所が分って良かった」、「土地の歴史について深く学習したことがなかったので、良い体験だった」ということでした。また、「引き続いて受講したい」という希望も多くあり、「私達だけでは勿体ないね」、「繰り返し聞きたいからテープに録音して帰れば良かった」という声が口々に上がっていました。

八雲神社

今期からは、この〝歴史の里・土居町ウォッチング〟を継続して実施し、他のグループと合同で（今年は若者塾〝めじろ塾〟と一緒に）実施する予定にしています。

この学習を通して、私達は数々の活躍をした土居の先人達の遺した物の偉大さに気付かされました。

そして、そ

大空古墳

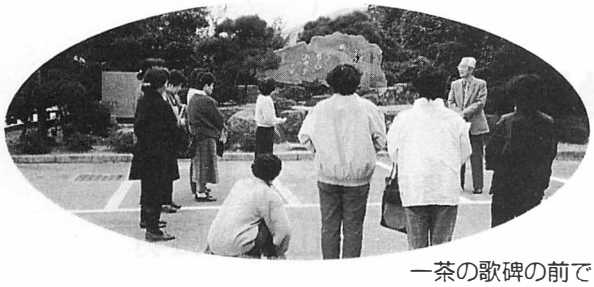
八雲琴の調べを

れらの原動力になったものは何なのかを考える様になりました。また、自分達だけでなく、これらの体験を他の人にも分けて上げたい、伝えたいと思った時、建物やその中身だけではなく、その周辺の道路や緑や草花への思い、そして、子供達にも理解できる案内板の必要性・学習活動の輪を広げるために、きちんと整理し展示できる場所の確保について等々、より多くの人に知ってもらう方法が次々と浮かんできました。

「ふるさとウォッチング」に限らず、いろいろな施設の見学や活動体験からも、今まで素通りしていた地域の様々な面に関心が広まり、また、いろいろな人の生き方に触れて、物の見方に幅ができたと思います。

より多くの人が利用できる様にする為の工夫、使いやすく住みやすい環境を整えていくために知恵を出し合うこと。これらのことについて、各々が主体的な意見を持ちながら、グループとして主体的に行動に移して行くことの必要性も感じています。

町について、どうすれば良いのか、優しい気持ちで視線を凝らした時、その先に見えてくるものを大切にしたいと思います。私達らしさ、私達の町らしさが見えた時、本当の意味での借り物でない町づくりの企画が生れるような気がしています。本当の意味でのスタートは、先に述べたことの中から始まるのではないでしょうか。



一茶の歌碑の前で

塾生のチームワークで、焦らず欲張らず、活動の土台づくりをしていきたいと考えています。そして、他のグループにも参加協力を呼びかけながら、素敵な町づくりをする為にはどうすれば良いか、関心を持って情報をキャッチできるように、常に心のアンテナを作動させていたい。

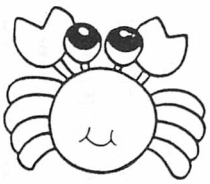
そんな思いを抱きながら、お互いの優しい気持ちが通い合うことで、「住んでいて良かった」という町づくりを目指して、みんなで学習を進めながら、一つからでも行動に移していけるように努力して行きたいと思っています。

村山神社

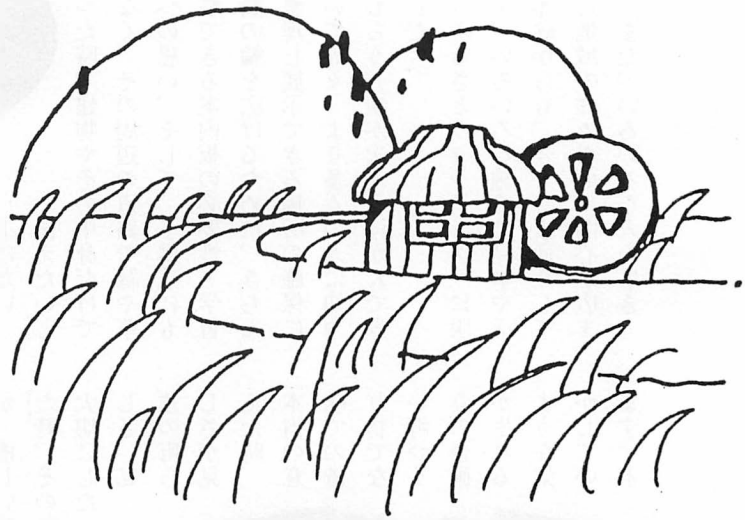
「さわやかな風」に乗せて、私達の想いを伝えられるように…。

今後、子や孫の世代にふるさとの良さをきちんと伝承できるように。

そして、緑溢れ、野鳥の声の聞こえる豊かな自然を大切にしながら、お年寄りや子供達と一緒になって、町の隅々までゆっくりと散策できる「優しいルートマップ作り」の企画（文明の利器を使わなくても良い方法も含めて）等にも取り組んでいけたら〝いいなあ〟と思っています。



服部幸佐衛門墓



『地域から学ぶ』

丹原町生活文化若者塾
山内　雅明

この数年、地域から何を学んだろうか。

まちづくり総合センターの協力を得て、ふるさとコンサルティング事業に取組み、その中で、アドバイザーの皆様に「地域を手のひらにつかむ」ように地域を知ることの重要さをご指摘いただき、地域を知る活動として、歩いて写真を撮り始め、丹原町再発見として写真展をし、ポストカードを作成しましたが、いつの間にか、手段と目的をとりちがえもしました。

その間、いわゆる過疎化もしたが、自然とともにいる快適空間となっているふるさと、さらには地域を知らない自分に気付き、日常の平穏な日々の中で見落としていた地域の姿を再発見出来たと思っています。

左端が山内さん

そして、その時その時点での自分の感性・意識・知識の範囲でしか、地域を知ることができないと感じました。

文明の発展の反面、営利主義による過度の自然破壊、生活環境の悪化が進んでいると感じ、効率という名目で、古いものは不便で不経済だと取り除く、そのような感覚を無意識のうちに持っている自分に気付きました。

このような反省から、これからの活動について考えました。

第一には、地域から学び、素材を磨く努力をする。しかし、そのためには時間と労力がいる。素材と自らを磨き続けることに耐える体力、気力と楽しさを持ち続けたいと思います。

第二には、自分たちの日常の見馴れた風景でも、初めて見る人では感じ方が異なります。

自分たちが、当たり前であると考えてきたことでも、実は相当に独自なもので、手直しをした方がよさそうであることに気付いたりするものです。このように、交流は異なった文化に接触することによる自己発見であり、自己改革へのきっかけとなります。

また地域にどのような物があるか、魅力、良さを見つけることにもつながります。

交流は、自分の地域を見抜く眼を養い、その潜在的な可能性を引き出していく発想と能力を鍛えるためにこそ行うに値します。

交流のもたらす最も大きな効果の一つは、地域を相対化する眼を持つということ。地域はともすればその地域の中に留まり、安住しようとします。しかし、そこから地域を再生し、活力を生むような新しい価値の創造は不可能です。

交流によって、その地域内にこれまでなかった新しい価値観を導入することが可能となります。つまり交流する相手によるこれまでの経験を、自らの地域にも適用す

ることも可能となります。

これからは、今までの地域の人々とは異なった価値観や考え方を持つ「人材」を地域に誘致していくことも必要です。彼らの眼を通してこれまでの地域を見ることで、地域に新しい断面をつくりだしていくことになります。

このようなことから地域を知るために、外に出る、また外の人との交流をすることを心がけています。

そのために、これからも、県内・県外を問わず中国、東南アジアの人々と国際交流も進めようとしています。

第三には、自らの感性を磨く必要性と価値観・意識を磨く必要を感じます。自分の感性・知識を磨くことなしには、地域を知ることはできないと感じています。

地域にあるもの、歴史を経たものをどう活用するか、あるいは、なぜ活用出来なかったのか。そのような時代の流れ、必然性を知ることが必要です。また、資源と人と時代の流れをつなぎあわせる目も養いたいと思います。

これといった資源がない、交通条件が悪い、どうしようもないとあきらめるのは、あきらめさせる風土の欠点を認めてそれを助長することになります。資源はこれしかないのではなく、このような可能性があると考えたいと思います。

広い視野を持ちながら、さらに平穏な日々の生活の中での地域内の意識の変化・変革のうねり、エネルギーを見いだすことのできる問題意識を持ちたいものです。

第四には、情報化社会といわれる世の中で、知っているつもり、疑似体験、間接情報による知識だけで、人間が自ら行う、作る実感が失われていったと思います。今「安いから」でなく、「作る楽しみ」を求める日曜大工、家庭菜園が盛んになっています。

このような時代だからこそ、自らの手でつくる「手作り感」。つくる過程、成果を自ら決めたという「選択感」。遂に出来たという「達成感」。そして「成長感」。

これが人の成長過程には必要であり、そのためにも様々な手作りの交流、イベントを行っています。

イベントを地域の流れを大きく区切る「出来事」として位置付け、つまり定例化し、カレンダー化した行事でなく、地域を流れる日々の中で、非日常的で衝撃的な出来事としての「イベント」を行おうと考えています。

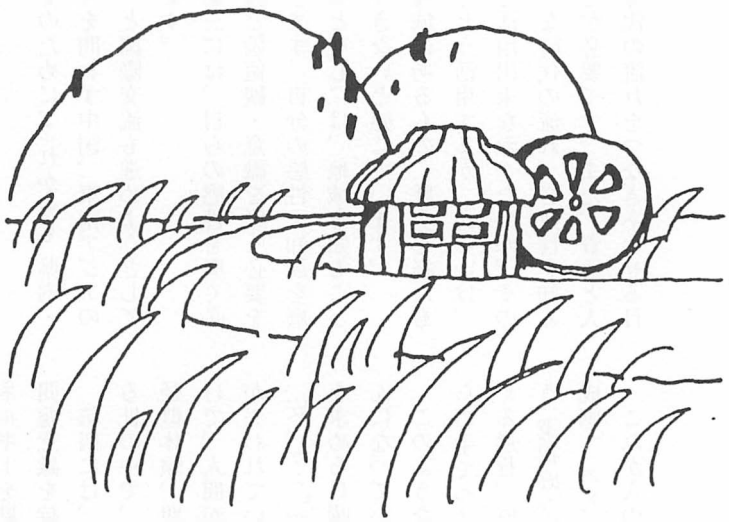
当たり前の事や決まり切った事が繰り返される日常生活で蓄積された願望が、非日常的な「出来事」を通じて出てくる。日常では見られなかった発想、能力、表情が堰を切った様にいきいきと外へ出てくる。イベントは、それに参加する人々を内から揺り動かし、新たな可能性を引き出させる衝撃力を持っています。

「イベント」は地域に対する覚醒作用、攪拌作用であり、停滞しがちであった地域を呼び覚ます。そして、地域内の人間関係をも、掻き混ぜこれまでになかった新しい関係へと導いて行くものです。

また、イベントは人を成長させてくれるとともに、仲間に信頼が生まれる契機であり、地域の内と外のネットワークの形成ともなります。そして、地域の中の資源に対する可能性への共通認識を積み重ねながら、今後、多くの人達と協力しながら続けたいと思います。

最後に教授する人が居て、その他の人は学ぶといった塾でなく、人と出会いお互いに学び、吸収する、そして自分を磨き続け、仲間と共に行動し、夢を実現する。そのような集まりの塾でありたいと思います。さらにいろいろな人、他地域からのゲストも、楽しく愉快に刺激的に集まれる場としての塾であり続けたいと思います。

「丹原しょうえー祭」にて



『限りなき挑戦 ―地域からの夢―』

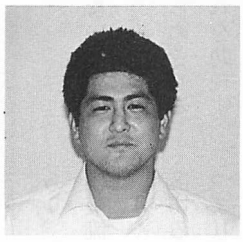
波方町生活文化若者塾
長谷部伸太

私と若者塾との出会い

「おい、若者塾に入ってみる気あるか？」

平成五年ももうすぐ終わりという、ある日、私は上司に呼ばれてこう聞かれた。

若者塾？以前より耳にはしていたのだが、それがいったいどんな活動をしているのか、また、どんな人の集まりなのか、まして、若者塾と名乗りながら何かおっさん（失礼！）も混じっているし……。役場の職員という立場上、いろんな会にも参加し様々なイベントの手伝いもさせてもらってはいるが、この若者塾という二十名足らずの集団、何かニオイが違っているようだぞ。前から興味もあったしこれは面白いかもしれない、ということで「入ります。入れてください。」と返事はしたものの、期待と不安の入り交じった複雑な気分であった。



元気印！若者塾

そんな気持ちのまま最初の会に参加した。

あれ、何か私の知ってる会じゃないぞ。みんなが一生懸命に議論してる！

私の知る限り、そもそも会議というものはあらかじめ用意されたシナリオの基に成り立つものであり、そのレールの上を辿ってのみスムーズに進行される。その結果として、参加者は睡魔との戦いになるというのが私の今までの会という物に対する認識であった。

こりゃ面白そうだぞ……

ところで、何をそんなに真剣に議論していたかというと、あるイベントを開催するための事前打ち合わせをしていたのだ。イベント名は

「波方冬物語
ときめいてスキーツアー」

それにしても何ともインパクトのある命名ではないか！ちなみにこのイベントの開催趣旨は、スキーというスポーツを媒体として、男女の出会いの場を提供するとともに波方町をより魅力的な街にしていこうという事であるが、ぶっちゃげた話、みんなで楽しくスキーに行こうという極めてフランクな感じのものである。そして、私が最初の会に参加した時、そのイベントの骨格ができてそれに肉付けをしていこうという段階であった。まあ、いろんな意見が次々と出てくる。その意見からまた新たな問題が出てくるというように、一つの物事を成功させるためにはかくも膨大なエネルギーが必要なのかと思い知らされた。

郷土史を学ぶ

頑張った！疲れた！そして…

このように、紆余曲折を経てイベントが開催され、そしてそれは大成功（であったと思う）。参加者の中からも、もう一度このイベントを開催してもらえないかという声が聞こえているが、その度にあの時の楽しかったことや苦労が思い出されてならない。

確かに疲れもしたし、ない知恵を絞って考えられる全てのことをしたつもりだ。そして、イベントが終了したときに感じた虚脱感と安堵感の入り交じった何とも心地好い疲労感は、今でも忘れられないでいる。

みんなこの気持ちを味わいたいがために、一生懸命に議論していたんだとその時理解できたと同時に、お互いの意見のぶつかりあいの中から、地域の歴史や人間関係等を学ぶことができたような気がした。

WHAT'S THIS 若者塾？

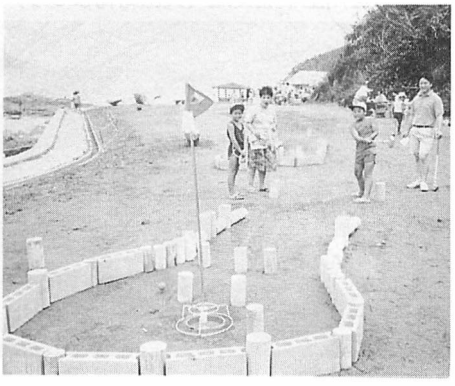
とまあ、私が塾に入って最初に行ったイベントを通じて私なりの若者塾感をだらだらと今まで書いてきたのだが、そもそも塾の基本というか根本は「まちづくり人づくり」。例えば、平成二年に行われた「チャイルドランド波方」というイベントがあるのだが、このイベントの経緯は、新しく造成された大角海浜公園という公園があって、そのオープニングセレモニーに、行動力のある若者塾でイベントを盛り上げてほしいという町からの依頼があって、親子を対象としたイベントを行った訳であるが、このようなイベントを通じてまちづくり、人づくりに貢献したり、波方町をより詳しく知るための学習会、地域と密着した活動をということで清掃活動を行ったりしている。

これからも、このような活動を重ねながら、オンリー・ワンを目指して地域の魅力探しを続けていきたい。そして、今よりももっと住みやすい波方町になればと思っている。

人と人とのすてきな出会い

常々、私は「友人は財産である」と考えている。ことに、私のような職業の人間ならなおさらのこと、この塾、その財産を増やすにはもってこいだ。それこそ、塾に入ればドンドン増える。塾自体は、先に書いた様に二十名程の小世帯なのだが、よくもまあいろんな人を集めたものだ。正に「二十人二十色」。そして、その輪がだんだんと広がっていくことで、お互いの共通の話題・ふるさと意識が高まっていけば、とても素晴らしいことだと思う。

もしかしたら、若者塾の存在意義はそんなところにあるんじゃないかと思ったりもするし、それが一番のまちづくり地域づくりになるような気がする。



最後に……

私の故郷、波方町は高輪半島の先端にある面積15㎢程の小さな町。そこに一万人程の人々が暮らしていて、会社に勤めたり漁業をしたり農業をしたり、いろんな人が生活している。温暖な気候のせいか、人の心も概して暖かく、そのくせ結構アクティブな町。

そんな町が好きで、どうせならもっと楽しくしてやろうとして出来たのが若者塾。

今までいろんな事をして来たが、まだまだ夢は膨らむばかり。十年後、二十年後が楽しみなのは私だけではない筈だ。

論談――まちづくり――

今、地域づくりは

大分県大山町役場
緒方英雄

✣学びあう心

わが町、わが村に活力をということで提唱された大分県の「一村一品」運動は、中途で「一村一風」と名称を変えたものの既に十五年目を迎えた。

この間、運動は全国的に広がりおかげで九州山脈の懐に抱かれた田舎町にもたくさんの視察者が相次ぎ、担当者は嬉しい悲鳴をあげている。

しかし、視察者の多くは完成された施設や稼働中のシステム、あるいは新規に開発された農産物などをひととおり見学すると、近くの温泉宿へと引き上げていく。

英語に『HOW』と『WHY』という単語があるが、日本語の『どのようにして』『何のために』と言う言葉に該当するだろう。

このような視点から視察者を眺めてみると、その大半が『どのようにして』という事実の説明で終り、『何のために』といった事実の意義を求める姿勢に欠ける気がしてならない。

教科書はないと言われる「ムラおこし」にとって必要なことは、何をしたかというテクニックを覚えたり、真似をする材料を探すのでなく、『考え方』や『思想』『哲学』を学び合うことこそ大事であろう。

✣「一村一品運動」の文化性

なにはともあれ、こうした視察の成果もあってか『ふるさと産品』の開発は地域間競争の様相を呈している。しかし、全国の市町村で開発されたものを見るとき、みそ、漬け物、ワインに代表されるように、その中身は「多村一品」であるのが現状である。

その背景には地域の特色を生かしたり、埋もれたものを掘り起こすことによって生まれた一品でなく、農産物の格外品などの処分に窮して作り出した一品であったり目先の採算性や雇用の拡大だけを目当てに、それに見合うものとして選ばれた一品であるなど、都市のニーズとは無関係に生産が行われている面も多く見られる。

しかも、原料の選び方や加工方法に工夫や研究のあとがなく、他町村の真似に終始していることが百品の競争でなく百村による一品競争を作り出したと思えて仕方がない。

しかし、一村一品運動は単なる商品化運動としてではなく、都会では味わえない楽しみをつくりだす文化運動としての一面ももっていることを忘れてはなるまい。たとえ原料はありふれたものであっ

筑後川上下流交流（大山町梅まつり）

ても、加工に工夫を凝らして付加価値を高め、その創意工夫の面白さ、創ることの楽しさを地域住民が共有できる。むしろ、その結果としての一品を重要視すべきであろう。

こう考えてくると、生産規模についても収益性を追求して工業生産を目指すのではなく、小ロットで希少価値を高めることのほうがより望ましいと思える。

❖地域が輝くには

それにしても画一的と思える地域づくりが、こうも広がる要因は何処にあるのだろうか。

ひとつは明治以来、欧米に生まれた近代技術や近代社会制度を改良し、応用、模倣し、今日の日本社会をつくりあげた国民性とその教育に根ざしていると思える。

例えば、教育の現状をみるとき権利の平等を能力の平等と混同し、画一的な教育が行われているし、そのことが個性と能力の自由闊達な開花を妨げている気がしてならない。

教育は元来、個人の能力が多様であるというこの事実を認めてやるべきだと思うし、それぞれの長所において卓越していくことを手助けするものでなければならないと思う。

二つ目は補助金制度である。これまで県や国では、町や村がいかに駄目かという説明に対して補助金をつけてきたし、駄目さをうまく説明することが有能な町村職員の証でもあった。そして、その際の駄目さの比較は常に、都市に対してであった。

たしかに都市の持つ機能に対して、限り無く近づくことが良い町づくりという想いがあった。永い歴史の中で培われてきた生活文化や、産業、自然、景観など、そのための開発であれば錦の御旗であった。

ところが最近、ムラおこしの仲間内で、地域づくりはいかに駄目かという議論をして本当に駄目になっていくことではなく、いかに良いところかを議論し、その部分を伸ばしていくことだと思う連中が増えてきた。

❖都市と農村のいい関係

道路交通網、あるいはモータリゼーションの発達で東京や福岡、周辺の町がすごく近くなってきた。もう無理に小さな自治体でホールや博物館、美術館など、安物のワンセットを揃える時代でもないような気がする。

逆に、かなり広い範囲でワンセットを考えるとき、そこに個々の良いところが見えてくるし、うまく機能を補完し合うことができるのではないだろうか。

都市は都市、農村は農村、しかも、それぞれがその長所を生かしきるとき『交流』『融合』『補完』といった新しい関係が創りだされるだろう。

福岡都市圏への飲料水を確保するダム建設の仕事に関わって三年、「水縁」をテーマに都市と農村の共生についての可能性を模索する毎日である。

日本一のうめぼしはどれかな

みんなの夢を明日へ、大山有線テレビ

キラリ光るまち

次世代へつなぐまちづくり

愛知県瀬戸市役所　中桐章裕

瀬戸市は、愛知県の北東約二十kmに位置し、昭和四年に愛知県で五番目の市として誕生しました。市の面積は百十一・五二㎢、人口は十二万九千人あまりを数えています。本市の中央部を占める丘陵地の地質は、瀬戸層群と呼ばれる地層で、やきものの原料である良質の陶土を豊富に含んでいます。また、北部や東部の山地はやきものづくりの燃料であった樹林が広がっています。これら自然の資源が本市を支え、燃料は薪から石炭・重油そしてガスと時代に沿って移り変わりましたが、平安時代から千年もの長い間、陶磁器を焼く炎を絶やすことなく発展し続けた歴史と伝統を誇る「せとものの まち」です。

瀬戸市では、昭和六十年九月以来、「まちづくり計画策定事業」に取り組んできました。この事業は、住民が主体となり、自分の住む地域のまちづくり計画を作るものです。本市がこの事業に取り組むこととしたのは、従来の行政主導型でなく、実際にその地域に住む人々が主となり、他の住民と知恵を出し合って議論を重ね、自らの手でまちづくりを進めていくことが、まちづくりの本来の姿であると考えたからです。

昭和六十一年八月に、人口約六百七十人、面積約十一㎢の一学校区である「山口地域」を、まちづくりモデル地域として選定しました。山口地域がモデル地区となったのは、無秩序に近い形で市街化が進展しており、こうしたスプロール化を防止しようとする動きが地域にあったこと、市としても今後の瀬戸市における重要な整備地域として位置づけていたこと、地元のまちづくりに対する意欲があったことなどの理由からです。

そして、翌年四月に委員数三十八名で「山口地域まちづくり協議会」が発足しました。協議会委員は、各町内から漏れなく選定され、地域の諸団体からも代表が参加しました。以後、市は内部の検討組織「まちづくり計画策定調査委員会」を発足し、両者が一体となって、タウンウオッチング（現地踏査）

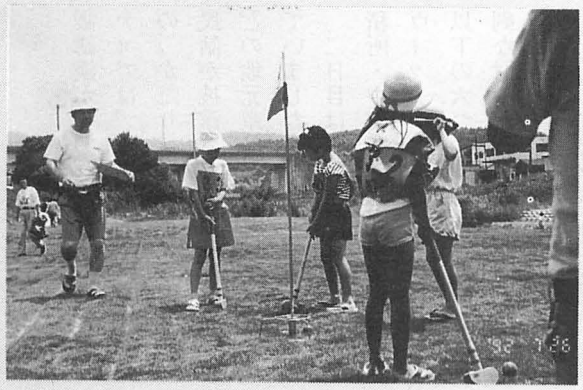
タウンウォッチング

活発な部会

や、延べ二百回に及ぶ部会討議を重ね、平成元年三月に「山口地域まちづくり計画（みんなの手で実現するニューライフタウン山口）」を策定しました。現在では、協議会の委員数も五十三名に拡大され、多目的広場の整備、史跡イラストマップの作成、親水フェスティバルの開催や各種勉強会の開催、まちづくりニュースの発刊などに取り組んでいます。

こうした山口地域での効果を他の地域においても広げたく、平成三年二月に、人口約七千五百人、面積約十八㎢の「水野地域」において、二つ目のまちづくり協議会「水野地域まちづくり協議会」が発足しました。この地域は、市街化区域内農地でのスプロール的な市街化形成が進みつつあり、早急に何らかの指針を定める必要があると地域も市も考えていたことと、地元において、川をきれいにする運動や地元のまつりがあったりと、まちづくりについての熱意が高い地域であったことが協議会活動の契機となりました。そして、延べ二百五十回にもわたる会議を開催し、平成五年三月に「水野地域まちづくり計画（豊かな森・清らかな水―語らいのあるいきいきとしたまち）」を策定しました。現在は、協議会の委員七十二名により、遊休農地を利用した花いっぱい運動、近自然型工法による河川の整備、釣り堀池の整備などの事業に取りかかっています。

花の試験栽培園にて


グランドゴルフ大会

このように、瀬戸市では現在二つの地域において、住民による活発なまちづくり活動が展開していますが、問題点がないわけではありません。その問題点は、協議会活動がイベント傾向となっていることです。協議会委員以外の地域住民に対して、まちづくり活動をしていることを知らせんがために手っ取り早いイベントの開催となるわけです。必ずしもイベント開催は悪くなく、イベントを通じて学ぶこともたくさんあると思います。しかし、まちづくり協議会本来の目的はそうではありません。自分の子どもや孫が大きくなった時に、愛することのできる地であるようにと、何回も討議をして計画書を作りました。したがって、どの計画をとってみても、そう簡単にはできません。しかし誰かがやらなければ、地域が子どもや孫にとって住みよいまちにはならないのです。そのことを協議会委員一人ひとりが理解することができれば、今以上の活動へと結びつくと信じています。

まちづくりは、そんなに簡単なものではないこと、道のりは非常に長いものであることを、身をもって感じている今日この頃です。

まちづくりって麻薬みたいなもの・・・。

瀬戸市役所
〒489
愛知県瀬戸市追分町
64番地の1
0561
(82)7111

第三回環境自治体会議に参加して

研究員　尾崎　弘典

平成六年五月二十五日（水）～二十七日（金）の三日間、新潟県安塚町で第三回環境自治体会議が開催されました。

これは、十三自治体の首長（本県の内子町もその一つ）の呼び掛けにより、一回目は北海道の池田町、二回目は沖縄県読谷村で開催され、三回目が雪にこだわって雪国文化村構想を推し進める安塚町で行われた。

この会議は、自治体行政のすべての分野を環境という視点から見つめ直そうという発想からスタートしたものであり、首長自らが司会や発題者などの運営に関しても積極的に取組むなど、他に類を見ない特徴を持っている。

まず、一日目は、午後から矢野学安塚町長の歓迎のあいさつで開会、引き続き「環境と地域開発」と題して、村山隆征湯沢町長の基調講演が行われた。夜の歓迎パーティでは、オープニングで安塚町の〝かたりべ〟グループの方から民話が披露され、山菜の天ぷらなどの地元産品とともに、華を添えていました。

二日目は、河川の整備・ごみ集積所・中山間の荒廃田などの安塚ウォッチングも行われるとともに、以下の六つの分科会に分かれて真剣な討議が行われた。

第一分科会
テーマ：エコリゾート～都市と農村の新しい関係

第二分科会
テーマ：地球環境問題への自治体の取組み

第三分科会
テーマ：まちづくり・景観条例・環境条例

第四分科会
テーマ：ローカルアジェンダ21と国際協力

第五分科会
テーマ：中山間地農林業と環境問題

第六分科会
テーマ：環境教育と自治体の役割

以上の中から、参加した第一分科会についてご報告致します。

司会を午来　昌（北海道斜里町長）、発題を河野幸平（群馬県倉渕村クラインガルテン前支配人）、朝永　彰（大学生協京都事業連合職員）、中谷　健太郎（グリーンツーリズム研究所長）、村山隆征（新潟県湯沢町長）等の方々で、三時間にわたり討論が進められた。

その中で、朝永さんは、「ヨーロッパのリゾートは、地域の実状にあわせて開発をしているが、日本の場合は金太郎飴で、ドイツ・アメリカの先進的な取組みと比べ十年くらいの開きがある」、また、中谷さんは、「地域には動かない財産（不動産…山・川など）と、動いている財産（動産…料理・人材・芸術など）がある」と言われた。

そして、これからはその財産価値を高めるためにも、新しいものとの出会いの場を地域がどう演出していくかが問われているなど、実践活動に裏打ちされた迫力ある内容に、参加者も真剣に聞き入っていました。

今、過疎化・高齢化が進む中、人々の意識も、利便性の追求や経済優先から、精神的なゆとり・安らぎを求めてと変化をしてきた。

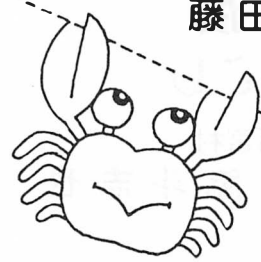
まさに、人間性が失われつつある社会への危惧が叫ばれているといっても過言ではないだろう。また、地球という社会に住む多くの生物の一員であるということを忘れた私たち人間のエゴが、今日の地球環境の破壊・悪化を招いたとも言えるだろう。

この会議は、このような反省も踏まえて、フロンの回収・オゾン層の保護・エネルギー問題に集約されがちな環境問題を、まちづくりという観点から、自治体の政策におけるコンセプトに明確な位置付けをしていき、その過程において、環境にやさしい生活スタイルへの改善、そして、住民との対話の中での共通認識の芽生え等を創出していこうとする試みでもあるのではないか。

最後に、会議の開催当日にスタッフとして、持て成していただいた安塚町職員の方々に敬意を表するとともに、今後より多くの自治体の参加によって、地球環境の改善・個性あるまちが増えるきっかけになることを祈りたい。

まちづくり研修レポート

研究員
藤田　良



平成六年六月六日(月)から八日(水)までの三日間、私たちは「歴史と文化を活かしたまちづくり」・「地域資源を活かしたまちづくり」という二つの研修テーマをもって、鳥取県・山口県方面を訪れました。

鳥取県では杉を活かした〝ジゲおこし〟に取り組む智頭町をはじめ、東伯町の『ＪＡとうはく』、倉吉市。また、山口県では、阿東町の船方総合農場、萩市などを研修訪問した中から、今回は、鳥取県東伯町の『ＪＡとうはく』での研修の模様をご報告します。

四門課長さん

（ＪＡが動けば農村は変わる）

東伯町は鳥取県のほぼ中央に位置し、大山を頂点、日本海岸を底辺にして、南北に細長い三角状をなす農業の町。昭和三十年代には稲作を中心としていたが、山間地では冬場は雪に閉ざされ、出稼ぎに出なければ生活を支えきれないという厳しい状況であり、何とかしなければという気持ちが空回りしていた。しかし、現在では農林水産大臣が視察に訪れるほど、先進的な農業の町として全国から注目を集めるようになっている。こうした変化を町にもたらす原動力となったのが、『ＪＡとうはく』である。

昭和四十年代前半、既に樹園地造成などの「果樹産地としての基礎づくり」を進めていた『ＪＡとうはく』は、さらに「果樹と畜産を中心とした複合経営を確立し、自立経営農家を育成する」ことを目指すこととした。

そして、経営リスクを少なくするためにＪＡが畜舎を建設し、それを農家に割安にリースするとともに、堆肥センターも運営するなど、農家の負担を少なくする方策を講じて来た。また、ミートセンター・チキンセンターなどの加工所やステーキハウスを整備し、京阪神に十数ヵ所に及ぶ流通・販売施設を整備するなど、生産販売一貫体制を確立して来た。

そして、昭和五十三年からは、生産活動支援一辺倒から生活支援にも取り組むようになり、農村の高齢化に対応するための社会福祉法人を設立し、高齢者の余暇利用のための農園を備えた軽費老人ホーム（ケアハウス型）や特別養護老人ホームを開設した。また、働く家族を支援するための保育園・農村文化の拠点施設となるカウベルホールを整備・運営するなど、豊かな農村生活を実現するための各種の事業が展開されて来た。

実際に視察してみて、様々な『ＪＡとうはく』の施設すべてが、明確なコンセプトのもとに整備・運営をされているということが理解できた。「農業が基本。すべては産地づくりにつなげ農業生産につなげる」という方針が、それぞれにしっかりと貫かれている。

「ＪＡが動けば農村は変わる」とまで言いきる『ＪＡとうはく』のスタイルを、そのまま私たちのふるさとにあてはめることは難しいかも知れない。しかし、〝地域を良くしよう〟という思いがここまで町を変えていけるということは、まぎれもない事実である。目的を達成するために戦略があり、戦術がある。私たちはまず〝ふるさとを良くしたいという夢〟を持つところから、始めるべきではないだろうか。

最後になりましたが、ご多忙にもかかわらず、親切に対応して頂いたＪＡとうはく四門（よつかど）農地開発課長をはじめ、訪問先の各担当者の方々に紙面を借りまして心よりお礼申し上げます。

遅れていることのメリットを生かし今もう一度村おこし

新宮村
脇斗志也

五月二十九日（日）、第三回新茶まつりが行われ、五千人を超える人出で賑わいました。

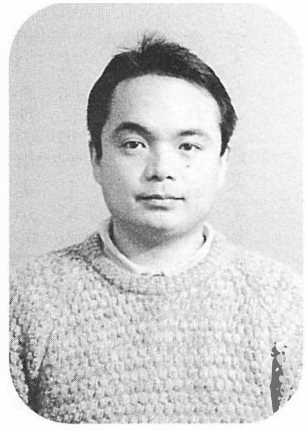
このイベントは、平成四年一月『高知自動車道（新宮インターチェンジ）』が完成・開通したのを記念し、〝何かイベントを〟と言う、インター周辺の住民の発案で始まったものです。また、新宮村の特産品であるお茶をテーマにしており、生業としてお茶に携わっている関係で、私も初回から深くかかわってきました。

これまで、青年団や青農クラブ（農業後継者の組織）などの活動を通じて、村の行事に参加し、様々な人達とディスカッションすることができました。そして、その過程の中で村おこしの重要性もある程度認識することができました。

そのことが、その後の塩塚スカイクラブ（パラグライダー教室）や若者塾の活動の糧となりました。

しかし、さすがに三度目になる今回、高速道路の威力を体験・目の当たりにし、人や車の波に酔うくらいのたくさんの人に来ていただきました。と同時に、いったいこの人達の中で何人が本当の新宮村を理解し、どれだけの人がこの催しに満足して帰って行くのだろうという思いを抱きました。私達が、今までと同様「手作りのイベントです。小さな村のイベントですから」とPRするだけでは、参加者も満足しなくなったように思います。

これからは、新宮村もハイウェイ時代の真っ只中に組み込まれていることを感じ、今までの自己満足的な地域おこしから脱却し、もう一度、本当のイベントの意味・村おこしの意義を問い直す時が来ていることを実感しました。



同時に、今ならどの団体が何のイベントを行っても、新茶まつりや紫陽花まつり同様、集客の面だけなら成功するかも知れません。

しかし、『村おこしは人おこしから』と言われるとおり、人おこしを怠ってきたツケが回ってきている事に、私達も今やっと気付いてきました。

十月には、松山自動車道が川内までつながり、徳島道も一部が開通し、四国の各地から平等な時間で集まって来れて、自然も豊富と言う理由で、アウトドアスポーツの四国大会や、研修大会を「是非新宮村で！」と言う問い合せが、数多くあるのですが、それを受け入れる組織や施設がなく、折角の話をお断わりしているのが実情です。まさに宝の持ち腐れ現象です。

愛媛大学の藤目先生に若者塾でご講演頂いた時、「新宮は一周後れのトップランナーになれますよ。人口に見合った施設を造ってはダメですよ。分不相応なことが可能な交通革命の中にあるのですよ。戸籍人口にこだわらずこれからは交流人口ですよ」と話された言葉が、今さらながら身に沁みます。

ですが、今ようやく新宮の人達も遅れている事を嘆くのをやめ、遅れていることのメリットを最大限生かせて行こうと考え始めました。

これから高速道路が伸びて行く南予地域の方も、是非考えてみてほしいと思います。

さざんかグループの歩み

城辺町
間口 千代子

昭和五十四年十二月、気心の知れた隣近所のおばさん達が集まり、おしゃべり会を作ろうという事で『さざんかグループ』が誕生しました。冬枯れの淋しい庭にぽつんと咲いていたさざんかの花を見てこの名をつけたのです。

発足当時、生活改善グループに加入し、研修や学習をしながら横のつながり、人と人とのふれ合いを求める等の交流を深めてきました。ボランティア活動では、国道沿いにさつきの苗を植栽したり、婦人会の方々と共に国道美化運動でビン・缶拾いの活動もしました。

やがて私達は、こうした活動にとどまらず、より主体的に自分達の身近な地域の福祉活動に目を向けようと、敬老行事に参画をしました。敬老会でのアトラクションで歌や踊りはともかく、何か手づくりのものはないかとあれこれ意見を出し合い、最終的に寸劇をしようという事になりました。

おじいさん・おばあさん方の若かりし頃、上演された「金色夜叉」「愛染かつら」「君の名は」等々、さざんか一座の名演技を披露、大喝采を浴び、そして、プレゼントは各家庭にあるものを持ち寄り、それに手紙を添えてあげました。これまた大喜びをしてもらい、私達全員はここでやり甲斐を確かめ合ったものです。

次年度からは、より具体的に活動計画を立て、積極的に会合を重ね、作業を実践しようと、六十一年度には、お年寄り三十幾人の方に座布団を縫ってあげました。各家庭では、「これはじいちゃんのや」「ばあちゃんのや」と決まったものはなかったので、「私の座布団ができた」「じいちゃんと二人、揃いのがもらえた」「おはれですわれる」等々、それは、それは大喜び、この喜びの声が地域に広がっていきました。私達は、次の年も、次の年も手づくりの奉仕に努めました。

一方、町の指導、依頼を受け、二年計画のコミュニティ農園作業にも取り組みました。これは転作水田を活用し、地域の人達とのふれ合いの場づくり、うるおいのある家庭や地域のコミュニティづくりを推進するという目的で計画されたものです。七畝の水田で、地域のお年寄りや、普及所の指導員から指導を受けながら農作業に取り組みました。

大根、バレイショ、百合の花、チューリップと季節毎に咲く花や野菜を育てたり、耕運機の運転にも挑戦しました。その他学習会にも積極的に参加しました。

平成四年度からは福祉協議会に加入し、高齢者介護についての心得や技術を学んだり、町内の寝たきり老人の方に寝まきを縫って、ヘルパーさんと一緒に家庭を訪問して、心温まる一時を過ごすことができました。

また、入浴サービス、独居老人への給食サービス、花いっぱい運動にと活動している会員もいます。

おしゃべり会に始まったさざんかグループの歩みは、今も『**明日へ向かって**』頑張っています。

次回は、一本松町の民家トラミさんにバトンをお渡しします。

リレーでちょっトーク

まちづくり雑感

愛媛県庁
松森 陽太郎
（前 研究員）

いろいろな方々に教えられ、励まされながら、センターの使命や存在意義について考えさせられた三年間が、今では実に懐かしく、どこか心地よい思い出として心に残っているのも、ひとえに様々な方々とのつながりがあってのことと感謝している。

とはいえ、センターの使命は、県内各地で一生懸命取組まれている「まちづくり」「むらおこし」への各種支援であり、決してネットワークだけが全てではない。確かに「ひと」に限らず、自治体や各種団体とのネットワークの広さはセンターとして当然のことであり、極論すれば職員というだけで、そのネットワークの恩恵に浴することができるのである。

もちろん、職員が例外なく県内全域のまちづくりに思いを寄せ、一生懸命に業務に精励していたのは言を待たないところである。

要は、このネットワークを如何に価値のある情報などの支援要素に昇華して行くかということが、センターの使命であり、存在意義もそこにあるように思うようになったのは、恥ずかしながら一年目を過ぎようとするころであった。

✣まちづくりのこと

まちづくりは、この十年の間に、一大転換期を経験したといっても過言ではないと思う。一つには、「ふるさと創生事業」による、まちづくり活動の全国津々浦々への浸透があり、二つ目には、情報化社会の中でのまちづくり情報の氾濫があると思う。最近、新聞に目を通すと、「まちづくり」という活字が必ず目に飛び込んで来るのは、単に私がセンターの勤務経験者ということだけではないような気がする。まちづくりに対する意識が変わり、時代が変わっていることだけは間違いないだろう。

ところで、情報過多の中で心配なことがある。よく耳にする「金太郎飴」という言葉だ。どこを切っても同じ金太郎の顔が出て来るという代物。飴の世界では面白いで済まされるかもしれないが、まちづくりの金太郎飴は気掛かりでしょうがない。習うのは大いに結構だが、真似るとなるとこれは問題である。地域それぞれに歴史、自然、風土が違い、生活文化を異にする地域が全く同じことをやっても、うまく行くはずがないのは自明の理である。

一見、突拍子もなく奇をてらった活動のように見受けられるまちづくりの取組みであっても、地域の歴史や自然に立脚したものは必ずしっかりと大地に根を張り、芽を出し、枝葉をつけてすくすく育っている。県内はもとより全国各地のまちづくりの先進地と言われるところは間違いなくそうだと断言していいだろう。

何をもって、まちづくりがうまくいったかということについては、誰も断じることはできないだろうし、その必要もないと思うが、一つの目安として、経済面と精神面の両面から捕えることができるのではないだろうかと思う。

つまり一つには、何らかの形で地域の産業や経済の活性化に結び付くこと。そしてもう一つは、地

域に暮らすひとたちの〝こころ〟が豊かになることである。奇麗事だけでまちづくりが進展するはずもなく、地域のひとたちの〝こころ〟の連帯無くしてうまくいったとは言えないだろう。

まちづくりの手法が種々様々なのは当然として、それぞれの目標とするところに大差はないと思う。目先の結果だけを求めて事を急いでは、決して地域の身となり骨となる成果は期待できないだろう。我々が生きている今の時空間は、長い人類の歴史のほんの一瞬に過ぎないということを考えるのも大切なことではないだろうか。

✣まちづくりの本質

まちづくりとは、一体全体如何なるものなのだろうか。

何を今更と不思議に思われるかも知れないが、このことはセンター職員として、いつも自問自答しながら考えさせられた難問だったのです。

まちづくり情報が氾濫する中で、地域が活気付き、何らかの形で地域経済が活性化しているのは理解できるが、今一つ釈然としないところがある。まちづくりの優等生と言われているような地域でさえ、一方では、全国規模の東京一極集中と同様の現象が、地域の中で静かにそして着実に進行しているという現実がある。地域レベルの過疎と過密の問題だ。

私見ではあるが、今日の過疎問題は、ある意味で社会病理の中から必然的に生まれたものではないだろうかという気がしてならない。

少々乱暴な言い方かも知れないが、今、過疎地と言われる地域では、何十年も前から過疎は進行してきたものと思われる。情報化社会といわれる中で、都市から地方への一方通行的な情報の流れを考えれば、刺激的な都市生活が若者のパラダイスが如く賛美されたり、経済的・社会的な豊かさが約束されているかのような情報が真しやかに伝われば、都会に目を向けるなというのはそもそも無理な話。それに追い打ちをかけたのが高学歴化社会とか産業構造等の変革に伴う社会意識の変化ではないだろうか。このように考えれば若者が地域に定着する要素は極めて希薄であったと言わざるを得ないのである。

かくして、近年まちづくりが真剣に論議され、地域ぐるみの取組みが一生懸命になされているのは、こうした過疎地と呼ばれるところがその大部分を占めているのである。何ともやりきれない思いがするのは、私だけだろうか。

ここで考えなければならないことは、「何のために」ということである。

まちづくりは、地域に暮らし、地域を生きるひとたちが自分たちの人生に潤いと安らぎを得るために行う日々の活動であって、他人に言われてとか、余所がやっているからとかいった動機でスタートしたのでは、こころの栄養補給もままならず、収穫も少ないのは目に見えている。先ずは如何に自分自身のこととして真剣に考えられるかが大切であり、ひいてはそのことが社会に活かされ、地域の活性化にも結び付いていくのだと思う。

昨年、取材で訪れた新宮村上山中野地区の中野あじさいグループの活動は、正にまちづくりの本質を示唆してくれているような気がしてならない。

ひとりのあじさいづくりの活動が、地域へと輪を広げ、今ではあじさいが住民一人ひとりの生活の一部とまでなっている。そして、この手作りの活動は地域に誇りと自信を呼び戻し、過疎化の進む山間の集落にあって、「ここに住んでいて良かった」と素直に言わしめるまでとなっているのである。こころの豊かさが問われている現代社会の中で、爽やかな感動とともに、まちづくりの原点を教えていただいた気がする。

最後になりましたが、自分の人生で最も貴重な経験をさせていただいたことに心から感謝しながら、皆さんの活躍にエールを送り続けたいと思います。

家族と共にまちセンへ…

大三島町
藤原元久
（前 研究員）

愛媛県まちづくり総合センターでの二年間の研究員活動を振り返ってみると、自分にとっては今までに無く公私共に充実した二年間だったと思う。大三島という、ある面では閉鎖された地域で生活してきた私にとっては、島外での暮らし、ことに県都松山での二年間はいろいろな面で刺激的だった。そこで、この二年間を私なりに振り返ってみたいと思います。

「愛媛県まちづくり総合センターへ出向してみないか」と町理事者から話があった時、自分の気持ちの中では早くに決心ができていた。「こんなチャンスはめったにあるもんじゃないだろう。自分再発見のためにも松山で頑張ってみたい」。もちろん、妻に相談をする前のことである。

ちょうど、長女が地元の保育園に入園するための準備をしていたころであり、妻は知らない地域での子供達の生活の不慣れも大きな不安の一つとして、最初は反対だった。「もし、どうしても行くんなら単身で」というところを、「子供らにしても、この歳に（長女三歳、長男一歳）島外で暮らすことはまず無かろう。みんなで勉強のつもりで行こうや」となんとか説得して（実のところ、単身での暮らしに自信が無かったのである）家族みんなでまちセンへいくことになったのである。

とは言っても、困った時にすぐに手助けをしてくれるいい意味でのコミュニティーの中での生活に慣れていた私たち家族にとっては、初めての松山での暮らしに不安がいっぱい。幸いにも県職員の公舎をお世話いただいて、だいたい同世代の家族の集まりで、人的環境にも恵まれ、私はソフトボール、妻はソフトバレーボールのチームへ誘ってもらい、子供たちはすぐに仲良しの友達ができて、スムーズに新しい暮しに馴染めた。このことが、私がまちづくりセンターで仕事をしていく中で大きくプラスになったと思っている。精神的なところで家族が支えあって、いたわりあってこそ、いい仕事ができ、いい人間関係ができると思っているからである。

やる気十分（どちらかと言えば元気が空回りするタイプ）の私ですが、今まで、まちづくりや地域づくりに関わる実務について、何一つ実践してきたことのない私にとっては、大変な所へきてしまったというのが実感であり、その実感は、日毎に増すばかり。最初の一年目は、何を、どのようにしたらいいのかすら分からない状況だったように思う。

しかし、県内外の多くのまちづくり実践者の方々にお会いして、まちづくりや地域づくりの根底にあるものについての話を伺っているうちに、気付かされたことがある。「まちづくり、地域づくりといっているが、一体自分は、自分のまちのことをどれくらい知っているのだろうか」ということである。若者は出ていき、高齢化が進み、自分のまちには何の魅力も無いと思い込んでいるだけで、本当に魅力があるところに気付いていないのである。まちづくりセンターの主催事業、「地域づくり交流研修」で長野県浪合村を訪れた時に、「自分のまちに愛着を感じるのは、そのまちの歴史や自然について誰よりもよく知っているから」というK氏から聞いた言葉が、実に簡単明瞭で新鮮に聞こえたのは、自分の中に前述のことがあったからだと思う。また、K氏からは「山間の、谷の底で物事を考えるのではなく、高い山の頂上から見てみ

ること」ということも聞き、素直に感激した。

そして、同じ交流研修でいった長野県妻籠宿では、熱意と確固たる信念に裏打ちされたまちづくり理論、そして果敢な行動力により、歴史的まち並みの素晴らしい保存活動が続けられてきたものであり住人の日常生活をも含めた保存活動の難しさを痛感するとともに関係者の気概に圧倒されもした。長野県小布施町や滋賀県近江八幡市、高月町などなど……、を訪れ、そこで暮らしている方々とお話ができたこと。また、地域づくり交流研修事業の企画・運営に携われたことは、自分がこれから様々な行政活動を進めていく上で大きなプラスになり、思い出に残るものの一つともなった。

いろいろな人々に会うことができたことと言えば、県内でも東は川之江市から南は一本松町まで、愛媛県内七十市町村は考えていた以上に広く、それぞれ固有の特性を持っており、そこにはまちづくりに燃え情熱を注ぐ多くの人たちがいたことには、いささか驚かされた。

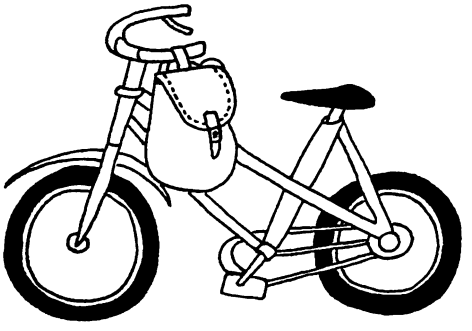
「夕日」という人の感性に訴える資源を見事に活かした地域づくりを続けている人、歴史的町並みの保存から村並みの保存へ、さらには生態系まで考えエコロジータウンの創出を目指している人、また、半島という地域特性を一から考え直し、どうやったら次世代へ自信を持って受け継がれる地域をつくっていけるのかを模索している人たち等々……。語り尽くせぬほどの多くの人と知り合うことができた。そして、様々な多くの人たちとの出会いと交流は自分のふるさとを更に見つめ直さなければいけないことの大切さを強く教えられた。

この二年間で、自分の仕事における認識の甘さやふるさとのアラばかりが目につき、落ち込むことも多かった反面、次第にやる気も湧いてきた。確かに過疎化、高齢化が著しい進行を見せているのは現実の問題であり、若者が流出してしまうのはある意味では仕方がないことである。魅力がないから人は残らない。人がいないから何をしてもダメという過疎の悪循環になっているのだと思う。先人たちの培ってきた生活の歴史や自然環境を残していきながらも、今までとは違った視点で物事を考えていかなければいけない。

そして、地域の文化性を高めていかなければならないと思う。そのためにはホンモノを見、ホンモノを聴くこと。どれだけそういったことに出会えるかで決まるだろう。受け身の姿勢でなく、フットワークよろしく、能動的にあくまで貪欲に探して見る。その機会を見つけるため、私たち行政に携わるものが率先して取り組んでいかなければならないことではないかと思う。

何事にも何等気負うことなく、より前向きに取り組んでいくこと、同じ土俵の上だけで考えるのではなく、たまには土俵から降りて、また違う土俵に上がってみたりしながら、知的交流を広げることを大切に、そして常に多くの刺激を受けながら、自らを高め活性化していきたいものと考えている。

一体何が言いたいのか、いささか支離滅裂になってしまいましたが、自分の思うことを、これから私のホームグラウンドである大三島町で一つずつ実行していきたいと思います。最後に、何かとお世話になったまちづくり総合センターの渡邊所長、松森主任研究員をはじめ、えひめ地域づくり研究会議の運営委員の皆さんにこの誌面をお借りしてお礼を申し上げます。



管見 スイスを歩いた2週間／見想録(XI)

【統一国家へのクライマックス】

宮本俊一

◆見逃す／ツヴィングリの彫像

「ステンドグラスが素晴らしいの…ぜひ見るべきだワ！」。スイスは二度目のKさんが、前回ぶらりと訪ねたフラウ教会での感動を語る。マルク・シャガール八十四歳の作で、聖書の世界を描いたものとか…。宗教と芸術がカイモクの私は、馬耳東風だった…が、チューリッヒ独り歩きの時を得て…ふと思い出す。

教会名は忘れていたが、リマト川の左岸で湖の近く…の記憶が、一つの教会に導く。ヤバイ！教会正面の閉じられたドアへの階段は、一見、浮浪者風の外国人らしい…五～六人が、寝そべったり足を大股に広げ腰かける等…不気味な気配で占拠。

一瞬、背筋を臆病風が…さりげなく方向転換。そうだ！有名な大芸術家の作品だ。こんな小さな教会じゃなくて、あの二つ塔の大寺院に違いない。そんな言い訳？でそちらへ向かう。アッ！こっちは右岸だゾ…と思う。これは錯覚だが、私は何時もリマト川の河口を湖と勘違いする。この時もそれ。「やはり宗教と芸術にはご縁がないか…」と諦め、前掲『森の精』に出会う散策…となる。

もし私が、この錯覚を起さず、前述の『現在でも宗教の分布が…スイス理解の一つの鍵』を知っていれば、臆病風等も吹っ飛び、ヴァッサー教会の前庭で、ツヴィングリの彫像を見れたのに…と、今も悔やまれる。

◆急進策／協調二派も流血の衝突

その連想で…宗教音痴の私の報告が、キリスト教を単純に旧教と新教の二つに書いたのは、とんだ誤りだと気づく。すると保守派・改革派も…その都度適当に書いたのを悔やみ始める。そこで本稿から社会勢力の性格を明確にし、前稿までも類推願おうと…虫のいい考えを持つ。

ともかく、一八三三年の誓約同盟／規約改正の挫折は、教皇庁中心主義をとるカトリック教会勢力の各邦を元気づけた。結婚や学校教育を教会の手に復古したほか、時代の進展を信仰の世俗化と考え、各種の押し戻し策を図る。これに対し、改革が成功して…カトリックと福音主義改革派が共生する七邦は、『バーデン条項』と呼ぶ「教会より国家（連）を優位とする…」条項を再規定する等して、その対抗姿勢を強める。

そうした中、チューリッヒでは啓蒙主義者が教育改革を進め、三三年に「チューリッヒ大学」を設けていたが、三九年、この大学の神学教授に…有名な自由主義神学者を迎えた。これに、それまで急進派に協調的だった福音主義正統改革派が激怒し、この人事撤回のみか…全教育政策の反対運動を展開。その動員した武装民衆は警官隊と流血の衝突を起す。

このため邦政府は辞職。議会は解散…選挙となって、保守派が勝利し「七邦協定」から離脱する。この政変はルツェルンへ飛び火し、四一年「制憲会議」は、カトリック保守派が多数を占め…『教会特権を認める憲法』を制定。「バーデン条項」を廃止し「七邦協定」も離脱する。

◆導火線／アールガウの改正憲法

このような…四一年、アールガウも憲法改正の期限を迎えた。この邦は、従来からカトリックと改革派の人為的平等を守り、三一年憲法でも…議会と政府の構成は、双方平等の規定だったが、「バーデン条項」を承認し…修道院は邦の管理だった。

しかし、現実に多数派である…自由主義急進派と福音主義改革派の連合勢力は、「より進んだ体制を…」と、人為的平等制の廃止を狙う。一方カトリック勢力は、人為的平等制の拡大とバーデン条項廃止を求める。そうした不穏な情勢を…現状維持で妥協させようとした『憲法改正案』は、双方の反対で否決された。

こうなると、数で強い自由主義急進派は、不利な人為的平等制の廃止と、宗教への配慮なく人口比により議員を選ぶ『憲法改正案』を、住民投票にかけて決定した。カトリック派は、これを「信仰の危機」と…武装蜂起に走るが、邦政府軍に難なく鎮圧された。けれども自由主義急進

派の政府は「この蜂起を修道院の扇動だ…」と議会に諮り、八つの修道院を全部廃止してしまった。

この措置に激昂のカトリック四邦は、誓約同盟に臨時会議を開かせ、アールガウを同盟規約違反とし、修道院の復活を命じる…決定を行う。だが、アールガウは四三年までに、四つの女子修道院を復活しただけ。しかし、誓約同盟会議は一件落着と…以後議題にしない旨決定した。

◆揺れる／誓約同盟会議の決定

これは、双方が同盟規約の「信仰の自由」と「邦の自治権」を盾に主張し合うので、解釈のジレンマに窮した…同盟会議の妥協策だったが、カトリック四邦と新たにヴァレーを加えた五邦は、四三年九月、ルツェルンで急進派に対する「共同防衛会議」を開いた。その席上、一部に武力防衛の声が出たため、自由主義急進派は「イエズス会が元凶の陰謀だ…」と、同会のスイス追放を図る。

ところが…ルツェルンは、元凶とされたイエズス会士に、学校教育と教会指導・神学研究などを委ねた。これを挑戦と見た…自由主義急進派は、四四年と四五年の二度も義勇軍を募って、ルツェルン攻撃を行うが…ともに撃退される。しかし、ルツェルンは危機感を強め、四五年十二月、カトリック保守派七邦を糾合…「共同防衛構想」を実行に移した。

これが有名な『分離同盟』だ。そこで自由主義急進派諸邦は、四六年九月の誓約同盟会議に、それを同盟規約違反として「分離同盟の解散を命じる…」提案をするが、過半数が得られず否決となる。ところがその後、ジュネーブとザンクト＝ガレンが政変し、四七年の誓約同盟会議は分離同盟反対派が多数を占めた。

ここに急進派の目標は、分離同盟の解散やイエズス会の追放だけでなく、年来の懸案／統一国家の実現へ…と一挙に高まる。同盟会議は同年七月「分離同盟を規約違反とし解散…」を命じる。さらに八月「誓約同盟の改革…」も決定する。この決定に対し分離同盟側は、十月に誓約同盟会議から代表総引き揚げで抗議するが、誓約同盟会議は十一月「分離同盟の武力解散…」を決定し、内戦／『分離同盟戦争』となる。

◆急進派／分離同盟戦争の勝因

スイス全土を真二つにした…この天下分け目の内戦は、分離同盟が八万、同盟会議が十万の兵力を挙げて戦ったが、武力と用兵に優った同盟会議が、僅か十八日間で勝利。双方の戦死者は、九十八人という…。

これには、予想された外圧がなかったことが幸いした。それは、スイスが自由主義急進派に牛耳られるのを恐れ、分離同盟を援助していたオーストリア、フランス、プロイセン、ロシアの四国が、開戦と同時に介入を図るが…、イギリスの反対で時宜を失したこと。**一八四八年一月**この四国が「同盟規約変更不承認…」を突きつけたが、フランスの「二月革命」を契機に、全欧州を吹き荒れた**「四八年革命」**の嵐が…各国をスイスどころでなくした僥倖だ。

ともあれ、ここに統一国家スイスの建設が始まるが、これまでの保守・急進両派の抗争を想うと、勝利が武力だっただけに…急進派によるその第一歩が懸念されるところだ。

幸い私は、それから百年後…一九八八年に初来日の前掲／クリスチャン・ゲルーディ氏が、この懸念を払拭できる…「祖国／スイス」を紹介した話の記録を持っている。

「土地がやせていたスイスは、過去百年の間に農業国から先進工業国へ、さらに世界でも重要な経済拠点に発展した。スイスは一八一五年から永世中立を保っているが、**政治基盤は、一八四八年以来続いている民主連邦で、今日では極めて独立性の強い二十六の州（半州も含め）を形成している。**議会は国民会議と上院による二院制だ。連邦政府の役割は、外交、防衛、関税、交通、エネルギー、農業、環境保護等に関する判断だ。各州は教育、税、文化、健康、警察等に関し、広く独自に決定している。そして殆どの州憲法は、スイス連邦三千九十五の市町村に、広範な自治権を認めている…」等々。

これは五十崎集会で、私が初めて聞いたスイスの話（『近自然河川工法』の抜粋要約）だが、今…百年前と想い比べ、当時急進派が、どんな第一歩を印したか…興味津々だ。

奥伊予しろかわ町に「きなはい屋」誕生

城川町

城川町に町民待望の特産品センター「きなはい屋」がオープンしました。本町は、「わが村は美しく」をテーマに幅広く村おこし事業を進めており、その一つに地場産品開発があります。今までは、産品を大々的に販売する施設がなかったため、町外からのお客様にはご迷惑をかけてきました。

この「きなはい屋」が五月一日にオープンして既に一ヶ月、おかげさまで順調に営業を続けております。主な販売品は地元の特産品を中心に構成し、大変好評を得ています。

また、本町では、宝泉坊温泉を中心に観光開発を進めており、こをその情報発進基地として、観光開発、特産品開発の相乗効果を生み出していこうと考えています。

年中無休を目標に社員一同、張り切っておりますので、ぜひ、一度奥伊予しろかわへきなはいや。

※問い合せ先
城川町特産品センター
☎0894（82）1100

太古のロマンを秘めた“端華の森古墳館”オープン

伊予三島市

栗の産地で名高い中山町に、また一つ、味な名所が誕生いたしました。その名も「遊栗館（ゆうくりかん）」、名産中山栗を五感で楽しんでいただける施設となっています。

これは、栗とともに歴史を刻んできた当町が、まちの顔として建設を進めている、「栗の里公園」のコア施設として整備したもので、本年五月十四日にオープンしました。

『遊栗館』でおいしい時間をどうぞ！

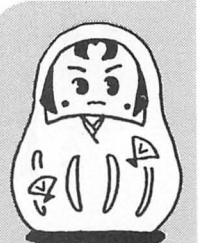
中山町

コンセプトは、「ふるさとの香りと栗の彩り」。木の香漂う館内では、秘伝のレシピによる様々な郷土料理や、栗をおしみなく使った遊栗まんじゅう、季節の果実を加工したアイスシャーベットなどが味わえます。

館外にはバーベキューコーナーもあり、山の幸をふんだんに盛り込んだ中山の味覚が楽しめます。

この施設は国道五六号線からアプローチできますので、通行の際には是非ともお立ち寄り下さい。

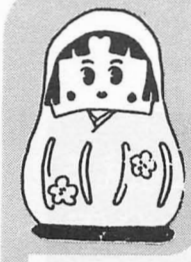
開館時間　午前十時～午後九時
問い合せ先
☎0899（76）0108



太古のロマンを秘めた“端華の森古墳館”オープン

伊予三島市

ス葺の蒲鉾型のドームで、石室を覆う全国的にも大変珍しい、古墳の永久保存できる工法をとっており、太古のロマンとドーム型の個性的な近代建築をマッチさせた、ユニークな建物で、考古学など各方面から話題を集め、県内外からの見学者や問い合せが殺到し、予想もしなかった嬉しい反響を得ています。



日吉夢産地オープン

日吉村

村の活性化のシンボル的施設として村民の期待を担った「日吉夢産地」が去る四月末にオープンしました。

この「日吉夢産地」は、村の中心地下鍵山地区の国道二九七号線、三二〇号線の交差地に、農産物の青空市場、レストラン、トイレ、特産品展示即売施設、駐車場等を整備したもので、村内はもとより、四万十川流域及び南予一円の特産品を展示即売することによって、村の活性化を図ろうとするものです。

毎週火曜日が定休日で、村特産の木材

「神の森大橋」「広田村交流研修の宿」完成

広田村

緑のふるさと・清流の村広田に、日本最大の木造橋「神の森大橋」、そして、七月オープンを目指す、「広田村交流研修の宿」が完成しました。

この橋は、長さ二六・四m、幅七・九m、設計活荷重二〇tを誇る集成材ニヒンジアーチ橋で耐用年数三十年（最低で）と言われています。

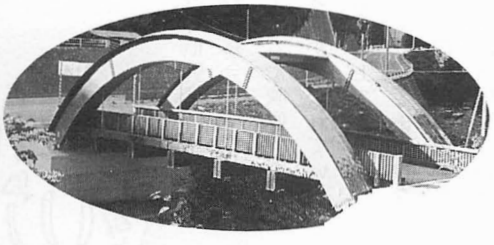
また、宿泊施設については、宿泊室八室の他、研修室、食堂、ランドリールーム等を完備し、家族や学生の方も滞在して頂けるよう、使用料も安くしておりますので、最新技術の集結した木橋も一緒にご覧下さい。

緑一杯の中、きっと心身共にリフレッシュできるでしょう。

あなたも一度、広田の美しい自然を感じてみませんか。

広田村交流研修の宿

☎０８９９（６９）２２５８

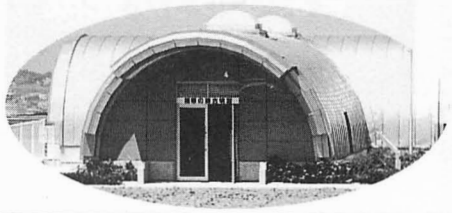


どうか一度、ご来館頂き、太古のロマンを堪能して下さい。

※問い合せ先

教育委員会　生涯学習課

☎０８９６（２３）２５００



端華の森古墳は、平成元年に発掘され、その規模や出土した副葬品等から、この地を治めた豪族等、様々な人物が推察されています。

この神秘に満ちた、貴重な歴史資料を長く後世に伝え、保存するため、「端華の森古墳館」が、オープンしました。

この建物は、鉄骨造りステンレをふんだんに利用した木の香かぐわしい施設ですので、皆様方のお越しを心よりお待ちしています。

※問い合せ先　日吉夢産地

☎０８９５（４４）２３４０

文化遺産を後世に伝える ふるさと歴史公園

伯方町

このほど伯方町の岩ヶ峯山頂に、ふるさと文化を受け継ぎ、後世に伝えることを目的にした「ふるさと歴史公園」が完成しました。

同公園には、岩ヶ峯にあった中世前期の山城「木浦城」を復元した居館、城門、望楼、ふるさとの歴史と文化を展示する展示館などが整備され、同時に、七世紀初頭のものと推定される岩ヶ峯古墳も復元されています。

居館一階には、岩ヶ峯古墳から発掘された製塩土器などの遺物が展示され、二階には伯方町をビデオで紹介するビデオシアターと体験学習室があり、三階の展望回廊からは右に燧灘、左に備後灘と芸予の島々を望むことができます。

展示館には製塩、造船・海運、産業・文化の各ゾーンがあり、AVシステムを駆使した伯方町の産業と文化を学習する場となっています。

この公園は祖先の生活を慕うとともに、伯方町の明日への「アプローチ」といえるものです。

※問い合せ先
ふるさと歴史公園
☎0897（72）2374

久万高原駅「やまなみ」が完成

久万町

久万町の新しい玄関、JR四国バス久万高原駅が完成、公募による「やまなみ」の愛称で、本年四月オープンしました。

この駅は、地元特産の木材をふんだんに使用した木造二階建て延べ床面積四五五平方メートルのモダンな建物で、一階には、乗客ロビー、観光案内コーナー、売店、トイレがあり、二階には、映画上映や美術展示などができる多目的ホールがあります。

「やまなみ」は、松山～高知間のバス利用者のオアシスであり、久万町が進めている「自然と共生する高原文化のまちづくり」、木にこだわるまちづくりのシンボルとなっています。

ロビーやホールでは、香りの商品づくりの研究会、グリーンツーリズムの研修会、環境問題を考えるフォーラムや映画会などの多彩なイベントが行われているほか、大変好評を博しています。

今後、まちづくり、芸術文化など、新たな産業創造等の情報発進基地として、フルに活用していきたいと考えています。

ぜひ一度お立ち寄りください。

※問い合せ先
久万町商工観光課
☎0892（21）1111

愛媛県から組織改正のお知らせ

愛媛県では、現行体制の維持を基本に、生活文化県政プラン21をはじめ、各般にわたる施策を積極的に推進するため、平成６年４月１日付けの組織改正を発表しました。

改正内容	担当事務等
「農業総合対策推進班」及び「地方局農業総合対策推進班」の設置	農業緊急安定対策を推進するため、農林水産部に「農業総合対策推進班」、各地方局に「地方局農業総合対策推進班」を設置しました。
「総合科学博物館開設準備室」及び「歴史文化博物館開設準備室」の設置	総合科学博物館及び歴史文化博物館の開設準備を円滑に進めるため、生活文化総室に「総合科学博物館開設準備室」及び「歴史文化博物館開設準備室」を設置しました。
「総合科学博物館」及び「歴史文化博物館」の開設	地域に根ざした個性ある愛媛文化の創造と生涯学習ネットワークの形成を図るため、自然や科学への理解を深めるための科学技術の振興拠点として新居浜市に「総合科学博物館」を、愛媛の歴史文化を学ぶ機会を提供する文化創造の拠点として宇和町に「歴史文化博物館」を、平成６年10月に開設します。
「トリガー産業育成推進班」の設置	地域発展の引き金となる新しい産業（トリガー産業）を育成するため、商工労働部に「トリガー産業育成推進班」を設置しました。
「新しい瀬戸内構想推進班」の設置	平成５年11月に策定した新しい瀬戸内構想に示されたプロジェクトを着実に推進するため、企画調整部に「新しい瀬戸内構想推進班」を設置しました。
愛媛県土地開発公社の改組	①　今治小松自動車道の用地買収事務を受託する愛媛県土地開発公社に「今治小松自動車道用地事務所」を設置しました。
	②　高速自動車道の南予への延伸に伴い、高速自動車道用地事務所を川内町から内子町に移すとともに、同事務所に「松山事業所」を設置しました。

「全国まちづくり情報」のお知らせ

前号でお知らせした「全国まちづくり調査」については、引き続き調査内容を整理中ですが、現時点でも来所、電話等により区市町村別（約1600ヶ所）の情報を提供できます。

情報内容

1　まちづくりのキャッチフレーズ

2　自治体で取り組んでいる特徴ある事業内容（ジャンル別）

○地域間交流○国際交流○特産品開発○芸術文化

○イベント○歴史・伝統・文化○景観整備

○健康・福祉○コミュニティ活動○その他

3　まちづくりの拠点施設、まちづくりグループの活動内容

ある夏の夜、海へ行った。
満天の星の向こうで、花火が光っては消えていた…
海に写し照らされる星はダイヤモンドのようで、さざ波の中で輝やいていた。
昼間置き忘れられたビーチボールが波の彼方にさらわれて、いつしか見えなくなってしまった。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係
二人のMs.（中路・川原）まで
〒790　松山市三番町八丁目二三四番地
愛媛県生活保健ビル三階
(財)愛媛県まちづくり総合センター
TEL 0899(32)7750
FAX 0899(32)7760

発行／平成六年七月一日
(財)愛媛県まちづくり総合センター
えひめ地域づくり研究会議